

コスプレ義母

～ 息子のためにブルマ穿きますっ！ ～

櫻木 充

【1】義母のムレ下着

梅雨明け間近の土曜日、昼下がりのこと。

このところの睡眠不足を取り戻すように、丸十二時間以上も眠りつづけていた三村信吾は、窓を叩きつける雨音を耳に留め、薄っすらと瞼を開いた。

信吾が通っている県立学園は、ここ宮城県では優秀校のひとつに数えられている。いつもなら土曜日にもみっちりと授業が行われているのだが、昨日期末テストを終えた今日は休校日になっていた。

「もう、こんな時間か」

枕元に置かれた目覚まし時計を一瞥し、おもむろに半身を起こす。

大きく伸びをしてベッドから降り立ち、何気なく窓際に歩を進める。

「ずいぶん降ってるな」

台風でも襲来したかのような荒天に見舞われている外の景色を眺めると、信吾は寝ぼけ眼を擦りつつ二階の自室を後にして、一階のダイニングに足を向けた。

この大雨にいったいどこへ出掛けたのか、室内に母の姿は見当たらない。テーブルには手製のサンドイッチとともに、息子に宛てられた書き置きが残されていた。

『今夜はお父さんのところに泊まります。夕食は店屋物で済ませてくださいね。

母より』

「ああ、そうか。そうだったよな」

母の書き置きを読んだ信吾は、昨日夕食の折に聞かされた話を思い出した。

母は今日、この春から東京に単身赴任している父の元を訪れる予定になっていたはずだ。東京の大学に進んだ姉も今春から独り暮らしをはじめており、ついでに様子を窺いにアパートに立ち寄るとも言っていた。

今夜は父のところに泊まり、帰宅は明日の夕方になるという。

「この雨に大変だな」

ガラス戸越しに庭先を見やり、サンドイッチを口に運ぶ。

とはいえ、のんびりランチを食べている気分ではなかった。

明日の夕方まで、この家には自分のひとりきりだと思えば居ても立ってもいられなくなる。信吾にとってはまたとない、秘密のひとり遊びを満喫できるチャンスなのだから。

信吾は早々に食事を済ませると、ダイニングを後にしてバスルームに足を向けた。脱衣場の戸を開けて、洗濯機の前に置かれたランドリーバスケットに目をやり、満面の笑みを浮かべる。

母は生命保険の外交員として働いており、洗濯は休日にまとめて行っているため、ランドリーバスケットの中には昨晚のまま、一週間分の洗濯物が詰め込まれていた。

中には目当ての「ブツ」もたんまりと収められているに違いない。

信吾はたびたび母、貴代の使用済み下着をオカズにして自慰に耽っているのだ。オードトワレの香りが移ったブラジャーやスリップに顔を埋めたり、蒸れたパンティの匂いを嗅いだり、あまつさえ股の裏地に残された女陰の沁みを舐めたりして……。

多少なりとも罪悪感を覚えてはいるが、己の行為がそれほど倒錯していると思ってはいない。さすがに堂々と口にするのは憚られるが、女性の匂いに興奮するのは男として自然なことだと考えているし、自分と似たような性癖を持つ人間も世の中には数多くいるのだから。

とはいえ、母親の下着をズリネタにする、その行為自体の異常性は認めている。母ばかりではなく姉や妹にも、近しい血縁関係にある異性に欲情するなどあってはならないと……。

決して自分のことを棚に上げて、肉親への性欲を否定しているわけではない。そもそも貴代は血の繋がりが無い、自分にとっては義理の母に当たる女性で、肉親とは言えないのだから。

実母は物心つく前に不治の病でこの世を去っており、父と貴代が結婚したのは今から五年前のこと。互いに子持ちの再婚で、現在東京で独り暮らしをしている姉の香奈恵は、貴代の実の娘だった。

貴代は今年で四十歳を迎えるが、営業の職に就いているせいか主婦然としたところは一切なく、まだ三十歳前後に見られるほど外見は若々しい。顔立ちは少々きつめで、冷たい印象を漂わせてはいるものの、かなりの美形ではないかと思っている。

実際、中学の頃は「美人ママ」として友達内では有名だった。貴代に会うため、さして親しくないクラスメートまで家に押し付けてきたこともあったくらいだ。

もちろん貴代の魅力は顔の美しさばかりに留まらない。完熟期に達した女の肉体もクラスメートの評価を押し上げる一因になっていたに違いない。

正確な数字は知らないがブラジャーのサイズはFカップ、物によってはGカップを着用している。豊かな胸に負けず劣らずヒップもボリューム感に富んでいて、しんなり垂れ下がっているところが妙にエロティックだった。

これほど想いを募らせている今となっては自信を持って言い切ることはできないが、たとえば貴代が実の母親だったなら、自分もここまで強い情念を抱くことはなかったはずだ。

近親相姦に対する罪の意識も働いていたに違いないが、しかし……。

「……さて、と」

そそくさと脱衣場に足を踏み入れ、ランドリーバスケットの前にしゃがみ込む。

信吾にとって義母、貴代は紛れもなく異性のひとり、愛欲の対象で、俗な言葉で言うなら「オナペット」だった。

表向きは真面目で素直な息子を演じてはいるが、貴代と二人暮らしになった今ではなおさらに、その肉体が悩ましく感じられていた。

もちろん義理であれ母親に手を出すなど許されないと、それは分かっている。

だからこそ、今の信吾にとっては貴代の使用済み下着が唯一の、劣情の捌け口になっているのだ。

「これは、要らないっ、と……これも、俺のだから、ポイッと」

洗濯物の山から自分の衣類を抜き取り、洗濯機の上に積み重ねると、信吾はランドリーバスケットを脱衣場から持ち出し、いそいそと二階に上がっていった。

だが、向かった先は自分の部屋ではない。隣にある姉の部屋だ。

信吾は匂いに興奮する性癖とともに、女性の衣類に対して強いフェティシズムを抱いており、たびたび香奈恵の私室に忍び込んでクロゼットを漁っているのだ。

姉のクロゼットには中学高校を通じて使用していた制服や体操着、部活のユニフォームやスクール系のコスチュームがふんだんに収められている、信吾にとっては宝物庫のような部屋だった。

香奈恵は勉強も優秀だったが運動神経も抜群で、中学時代には陸上部、高校時代には新体操部に所属して熱心に汗を流していた。

残念ながら目立った成績は修められなかったが、母譲りの美顔とスレンダーなプロポーションから新体操部の練習には香奈恵のレオタード姿をひと目見ようと、いつも多くの男子生徒が群がっていたらしい。

他にも中学時代のセーラー服や高校時代のブレザー、スクール水着や競泳水着など、信吾が好むコスチュームが多数収められている。

しかし、香奈恵の持ち物であることにさしたる意味はなかった。

香奈恵に対しても少なからず性的好奇心は抱いているし、オナペットにしたこともあるにはあるが、信吾の興味はコスチュームそのものに向けられており、誰の物であるのかなど問題ではないのだから。

もちろん姉に無断で部屋に立ち入っているわけだが、仮に知られたところで香奈恵ならば許してくれるはずだ。香奈恵にはコスチュームへの妄執も、匂いに興奮する性癖もすべて知られているのだから。

きっかけは二年前、貴代の沁みつきショーツをオカズにして自慰に耽っているところを香奈恵に目撃されたことだった。その現場で香奈恵から厳しく問い詰められ、信吾はすべてを白状させられていたのだ。

義理の母を性欲の対象としている、そのことまでも……。

香奈恵ならばきっと自分の心を理解してくれるはずだと、そのような思いがあったことも事実だった。いわゆる姐御肌というのだろうか。香奈恵はかなり勝ち気な性格で、男勝りの部分もあるのだが、意外に母性的で面倒見が良く、自分を実の弟のように可愛がってくれたから。

微妙で多感な年頃であったにも拘わらず、義理の母を抵抗なく受け入れられたのも香奈恵の存在が大きかったように思う。貴代を「お母さん」と呼べるようになったのも香奈恵のお陰だった。

あのと、泣き出しそうになりながら心のすべてを吐露した義弟に、香奈恵は言った。

自分の物ならば好きにしていっていいと、母への想いを捨てることを条件にして……。

香奈恵は下着ばかりではなく、新体操の部活で使用したスパッツやレオタードも好きに使わせてくれた。当然、洗濯する前の、汗にまみれたものを……。

そんな姉の理解と思いやりが、コスチュームに対するフェティシズムと女臭への妄執を強めた原因になっているのかもしれない。

それからというもの、信吾は姉との約束をしっかり守り、義母への想いも封印した。捨て去ることはできなかったが、どれほど興味を惹かれても義母の下着には一切手を出さず、自慰の「オカズ」はすべて香奈恵の使用済み……。

しかし、香奈恵が独り暮らしをはじめてしまった今では元の木阿弥。気づかれさえしなければ大丈夫、何も問題ないはずだと、ふたたび義母の洗濯物を漁るようになってしまったのだ。

保険外交員という職業柄、外に出る機会が多いため、貴代はデザイン性より穿き心地や機能性を重視したショーツを好んで穿いている。

要するに、契約を取るためには容姿の好感度も重要な要素のひとつということか。タイトスカートやパンツのヒップラインを美しく見せるため、シェイプアップ系やガードル機能を備えたショーツが主で、蒸れやすい品が多かった。

それらのデザインは少しばかり野暮ったい感じもするし、オバサン臭い印象でもあるのだが、匂いフェチの信吾にとっては喜ばしい限りである。外回りが多かった日のショーツは特にムレムレで、目眩を覚えるほど刺激的かつ官能的な媚臭を楽しませてくれたから。

ここ十日あまりは期末テストの勉強で必死だったため、義母の下着に手を出すこともなかったが、もともと性欲過多な年頃の信吾は今、溜まりに溜まっている状態だった。義母の媚臭を感じる以前から若竿はガチガチに勃起して、鈴口にはすでに先走り汁まで滲んでいる。

信吾はそそくさとズボンを降ろし、ブリーフを脱ぎ去って下半身を剥き出しにした。

つづけてランドリーバスケットの中から貴代の下着を探り出し、五枚のショーツと二枚の直穿きガードル、三着のブラジャーをベッドの上に並べる。

さらに部屋のクロゼットから香奈恵が中学時代に穿いていたダークグリーンの陸上ブルマーとスクール水着、高校時代の競技用レオタードを取り出して、フェティッシュな自慰の準備を整える。

「ええと……まずは、これにするかな」

口許を緩めつつ、淡いピンク色のヒップアップショーツに手を伸ばし、いそいそと股間部を捲り返す。

クロッチの裏地には期待通り、女陰を象るような沁みがありありと残されていた。鼻先にはゆらゆらと牝の恥臭が立ち込めて、愚息はますます辛抱堪らない状態に陥ってしまう。

しかし、マスターベーションをはじめるのはまだ早い。

信吾は逸る気持ちを抑えつつ、香奈恵の陸上ブルマーに内張をするように、貴代のショーツを裏返して中に収めた。我ながら馬鹿なことをしていると、内心では自らを嘲りつつも、秘部のエキスがこびりついたクロッチの裏地をブルマーの股座に密着させて、貴代の使用済みブルマーの作り上げる。

「はああ、ふうう、匂うよ、凄く……お母さんが穿いたブルマー、んんう、凄く蒸れてて、エッチな匂いがするよ」

満を持してブルマーの股間に鼻を擦りつける信吾。

虚空の世界で義母にブルマーを直に着用させ、スポーツ後の蒸れた股座に顔を埋めている、そんな場面を妄想して小鼻をいっぱい膨らませる。

フェティシズムが刺激されているせいか、ブルマー越しに嗅ぐ淫臭はいつもよりずっと芳しく感じられた。セピア色だった夢の世界も鮮やかな色彩を帯びて、愚息は玉のような腺液を溢れさせる。

「はぁ……あああ、お母さんんう、も、もう僕……我慢できないよぉ」

信吾はふたたびベッドに手を伸ばし、直穿きガードルを掴み取った。

クロッチの沁みに亀頭を押し当てて、すべすべとした化繊生地で竿をくるむ。すかさず手筒を上下に揺り動かし、義母の蒸れ股に顔を埋めたままでセックスをする、実現不可能なプレイを妄想の世界で楽しみながら激しく陰茎をしごいてゆく。

十日の禁欲生活で、自慰をはじめる前から暴発寸前だった愚息はすぐに音をあげた。やにわに高波がごとく絶頂感が押し寄せてくる。

しかし、射精するには至らなかった。

あと三擦り半というところまで昇り詰めていた信吾は直後、青天の霹靂とも言える事態に見舞われる。

あろうことか貴代の怒声が室内に響き渡ったのだから。

【2】ママは僕の着せ替え人形

「信吾っ、あなた何をしてるのっ!？」

「うひゃっ！」

どっぷり妄想の世界に浸っていた信吾は、突然の出来事に素っ頓狂な声をあげ、大きく身を弾けさせた。貴代が帰宅するわけがないと安心しきっており、にわかに事態が飲み込めずにいたのだが……。

「……お、お母さん!? あっ、いや……これは、その……」

肩越しに背後を振り返り、鬼のような形相で自分を睨みつけている義母に慌てて顔面に押しつけていたブルマーを投げ捨てる。いったい何故ここにいるのか、どうして帰ってきたのかなど尋ねられるわけもない。

信吾はただ勃起したイチモツを両手で覆い隠すのが精一杯だった。

「いったいこれはどういうことっ！」

「……………」

「何とか言いなさいっ！」

「……ご、ごめ……ごめん、なさい」

じっと項垂れたまま、必死に声を絞り出す。

当然ながら言い訳など見つかるわけがない。

「母親の下着をこんなことに……恥を知りなさいっ！ お父さんから厳しく叱ってもらいますからね、いいっ!? 分かったわねっ！」

「……………」

謝罪の言葉には耳も貸さず、頭ごなしに叱りつけてくる義母に耐え難い気分になる。

もちろん、叱られて当然のことをしたのだと、それは分かっている。身勝手な言い分かもしれないが、それでも、息子が何故、母親の下着に悪戯したのか、ほんの少しでも思いを巡らせて欲しかった。

受け止めてもらえないことは承知しているが、義理の母に想いを寄せている、この気持ちを一分でも理解してくれていたなら、ここまで一方的に叱ることはできないはずだ。

要するに貴代は自分の想い、その一切を拒絶したも同じである。

信吾は急に悲しくなり、ぼろぼろと大粒の涙を頬に伝わせた。

「泣いたってダメよ。お母さんは許しませんからね」

「だって、僕は……だって……」

お母さんが好きだったからと心の中で叫び、わなわなと唇を震わせる。

「だって何です。言いたいことがあるならハッキリ……」

言いなさいと、ひときわ声を荒げた貴代は、癪癪を起こした赤子のように大声で喚きだした息子に思わず言葉を失った。普段は滅多に感情を表すことがない息子のキレたような態度に少々狼狽えてしまう。

「ちょ、ちょっと……そんなに泣くんじゃありません。〇〇生にもなって」

「うわああん、ああああ！」

「分かった、分かったから、ね？ 二度としないって約束してくれたら、今日のことは許してあげるから、もう泣かないで」

ここまで大泣きされては、もはや叱りつけることなどできなかった。

貴代は信吾の傍らに膝をつき、そっと肩に手を添えて、耳元で優しく語り掛けた。

俯けられた顔を覗き込み、もう怒っていないことを伝えるように笑みを捧げる。

「さあ、泣かない、ね？ 泣かない泣かない……信吾はもう分かってくれたものね、ん？ 反省してるんでしょう。こんなこと二度としないって、お母さんと約束できるわね？」

「……うう……んんう」

泣き腫らした目に義母を映すと、信吾は二度三度と首を上下に揺り動かした。

肩口に当たる乳房の感触と、オードトワレに香りづけされた貴代の甘い体臭に少しだけ心を和ませる。

「さあ、涙を拭いて……もう一度、お母さんの目をちゃんと見て謝ってちょうだい」

「う、うん……あの、ごめんなさい。つい僕、その……」

「つい、魔が差したのね？ もちろん女性の下着に興味があることは分かるわ。信吾くらいの年頃の男の子なら当然のことだけど……でもね、いけないことなのよ」

思春期の性に対する好奇心に一定の理解を示すと、貴代はあらためて息子を諭すように言い聞かせた。

「……はい」

「うん、分かったならいいわ。お母さんはもう何も言わない……いい？ 信吾は何もしていなかった。今日は何もなかったのよ。それでいいわね？」

「……………」

口を閉ざしたまま、目配せをする信吾。

当然、赦しが得られたことに安堵はしていたが、同時に物足りなさも感じていた。何もなかったで済まされたくはないと、できるならもっと深く息子の心を理解してもらいたいと……。

「ああ、そうだわ。さっき何か言いかけたわね。お母さんに何を言おうとしたの？」

ようやく心を落ち着かせた信吾に、貴代ははたと思い出したように尋ねた。

「え？ ああ、うん……べつに、何でもないよ」

「いいのよ、隠さないで言ってごらんなさい。もう叱ったりしないから大丈夫よ。もしかして、他にもいけないことをしていたのかしら？」

「ち、違うよっ……あの……僕はただ、その……お、お母さんのことが、す、す、好きだって、そう言いたかったただだから」

ひとり遊びの秘密が知られた今だからこそ打ち明けられる。

信吾は上目遣いに義母の顔色を窺いながら禁忌の想いを吐露した。

好きだからこそ下着に悪戯してしまったのだと、胸中でひっそりと言葉を足す。

「うん、ありがとう。とても嬉しいわ……さっきはごめんなさいね。大きな声を出してしまって」

「ううん、僕が悪いんだから」

多少なりとも息子の告白が胸に響いたのか、愛おしげな眼差しで瞳を見つめ返してくれた貴代に、面映ゆそうな顔をして頭を振る。

「フッフ、そうよね。信吾がいけないことしたんですものね」

「うん……あのお、お母さんは僕のこと嫌いになってないかな？」

からかうように言葉を返してきた貴代におずおずと問い掛ける。

「ええ、もちろんよ。嫌いになんてなってない……ただ驚いただけよ。信吾がいい子なのはお母さんがよく知っているもの。それに、年頃の男の子にはマスターベーションも必要だと思うわ」

「……う、うん」

少々きわどい台詞に胸をドキリとさせて、信吾は恥ずかしげな笑みを浮かべた。

「とはいっても、ほどほどにね……まあ、今日は期末試験が終わって、ちょっと息抜きしたかったただだと思うけど。そうよね？」

「ううん、息抜きじゃないよ。だって僕は前から、実は、その……使ってたんだ」

「使ってたって、お母さんの下着をマスターベーションに？」

ベッドに並べられた洗濯物を横目で見やると、貴代は「いけない子」と言いたげに、演技じみた素振りで眉を顰めた。

「だって、お母さんのことが本当に好きなんだもん」

信吾は今一度、想いを告げた。少なからず貴代も息子の心を理解してくれたのだと、義理の母をひとりの異性として意識していることに気づいているはずだと、今の態度から臍氣に心中が察せられたから。

「あらあら、どうしたの？ 今日の信吾、少し変よ」

「お母さんのことがずっと好きで、だからお母さんの下着にも興味があって、それで、どうしても我慢できなくなって……」

はぐらかそうとした義母の声を聞き流すと、信吾は物欲しげな顔をして言葉を紡いだ。

「はいはい、もういいのよ。分かったから……でもね、信吾にこんなことされると、お母さんも恥ずかしいから、ほどほどにしてちょうだい、分かった？」

しきりに禁忌の想いを訴えてくる息子に当惑しながらも、貴代は遠回しに下着遊びを認めてやった。

「分かってくれたの？ 僕がお母さんを好きだってことを？」

「もう、信吾ったら。あんまりお母さんを恥ずかしがらせないで……本当に今日はどうしちゃった？ お熱でもあるのかしらね」

「ううん、前から言いたかったんだ。僕はお母さんのことが大好きだって」

つい先ほどまでとは打って変わって、室内に満ちてきた甘い雰囲気を感じつつ、信吾は冗談めかして言葉をつづけた。いけないことを考えていたと、エッチな想像をしてしまったと、心のどこかで危険なスキンシップを期待して、母の反応を窺いながら……。

「こおら、そういうことは言わないの。本当に困った子ね」

ほんのり頬を桜色に染め、微かに瞳を潤ませて、貴代はふっと甘い吐息を漏らした。義理の息子の想いにほだされて、心のガードが少しずつ緩みはじめる。

「だって、お母さんって凄く綺麗だし、友達もみんなお母さんのこと美人だって褒めてくれるんだよ。それに……」

「……それに、なあに？ 途中でやめないで」

「えっと、でも……言っても怒らないでね。僕だけじゃなくて、友達も言ってるんだから……お母さんの体って、その、なんて言うか……凄く、エッチだって」

友達からの高評判を聞かされ、多少は気をよくしてくれたのか、せっつくように話のつづきを促してきた義母に調子づき、信吾はきわどい台詞を投げ掛けた。

二人きりの室内には徐々に妖しげな気配が漂いはじめる。

「イヤだわ、信吾ったら、お母さんがエッチな体をしているだなんて……まったく、母親に向かって言う言葉じゃないわよ。それとも、褒めているつもりなの？」

「もちろん褒めてるんだよ。プロポーションも抜群だって……あっ、そうだ。ひとつだけお願いしてもいいかな？」

今の雰囲気ならもしかしたら聞き入れてもらえるかもしれない。たとえ首を横に振られても、何かのきっかけにはなるはずだ。

信吾は勢い込んで母に願った。ベッドに手を伸ばし、ワインレッドを基調にした香奈恵の競技用レオタードを手繰り寄せ、これを着てもらえないかと……。

「ちょ、ちょっと、いきなり何を……それって、香奈恵のレオタードでしょう？勝手に引っ張り出したら、後で怒られるわよ」

「うん、だからお姉ちゃんには黙ってて。ダメかな？ お母さんにきっと、絶対に似合うと思うんだけど」

「似合うって言われてもねえ、レオタードなんて……どちらにしたって、お母さんには着られないわよ。香奈恵のでは小さ過ぎるもの」

「そうかな？ レオタードの生地って良く伸びるし、大丈夫だと思うよ」

息子の助平心を見透かしていながらも、無下に断ろうとはしなかった貴代に脈ありと判断し、強引にレオタードを手渡す。

「……………」

「着られなかったら仕方ないけど、とりあえず……」

試着してみてくださいなかと、すっかり勃起を取り戻したイチモツをTシャツの裾で隠すと、信吾はスがるような眼差しで母にせがんだ。

「まったくもう、信吾ったら調子に乗って……あのね、分かっていると思うけど、こんなことお父さんには言わないでちょうだい」

「言わない、言うもんか」

願いを聞き届けてくれた義母に破顔一笑し、大きく首を縦に振る。

口止めしてきたことからしても明らかだが、貴代も十分に承知しているようだ。

するべきではないと、夫には決して知られてはならないことだと……。

にも拘わらず、レオタードを着ようとしてくれる義母の胸中を推し量れば自ずと蜜戯への期待感も強くなる。

「このことは、お母さんと僕の秘密だね？」

「そうよ。お母さんと信吾だけのひ、み、つ……それじゃあ、少し待っていて。たぶん着られないと思うけど……」

欣喜雀躍した息子に当てつけがましく溜め息を吐くと、貴代はレオタードを手にして一旦部屋を出て行った。

それから五分ほど待たされただろうか。

扉の隙間からこそと貴代が顔を覗かせる。

「ねえ、信吾……このレオタード、やっぱりきついわ」

「着られなかった？」

「ううん、一応、着ることはできたけど……」

恥ずかしげな面持ちで言葉を濁すと、貴代は躊躇いがちに扉を開き、レオタード姿を披露した。

「うわっ、うわあっ！」

期待していた以上に悩殺的な装いに、信吾は爛々と瞳を輝かせ、ビクビクと男根を脈打たせた。

やはり香奈恵のサイズではきつ過ぎたようで、レオタードのスパandex生地は今にも裂けそうなほどパツパツに伸びきり、完熟期の豊満な女体をかろうじて包み込んでいるような状態だった。まるで女兒用のワンピース水着を成人女性が無理矢理着用したかのような光景である。

丸首デザインのため胸元の露出は楽しめないが、Gカップの巨乳は真空パックでもされたように平たく潰れ、乳首までもがひしゃげていた。本来は控え目なはずのビキニラインも見事なハイレグに様を変え、股間を縄のようにぎっちりと締め上げており、その左右からは盛大にヘアがはみ出しているではないか。

もちろん息子の目に晒すのは憚れる姿だが、どうやら貴代も覚悟を決めてくれたらしい。義理の息子と禁忌を犯すことへの……。

現に貴代の表情はますます艶っぽく変わり、明らかに色欲を帯びていることが窺えた。きわどいレオタードを着用し、その姿を息子に視姦され、少なからず性的興奮に囚われてしまった様子である。

（お母さんのこんな顔、今まで見たことないよ）

桜色に染まった美顔を上目遣いで見つめると、信吾はこの先のエスカレーションに期待を膨らませながら、前から後ろからレオタードの女体を視線で舐めまわした。

鏡餅のように平たく潰れた乳房、艶やかなスパンデックス生地にラッピングされた腹部、背中ライン、そして、Tバック状態になった後ろ身頃からはみ出したLサイズの熟臀を無遠慮な眼差しで……。

極小レオタードに飾られた女体はどこもかしこも悩ましく、思春期の瞳を虜にしたが、一番の関心事はやはり股の中心部、女性の秘所である。

信吾はそそくさと貴代の足元に跪くと、僅か三十センチと離れていない距離から股座に視線を集中させた。

「もう、そんなところばかり見て。信吾は本当にエッチな子ね」

「だって、興味あるんだもん」

茶化すように声を掛けてきた貴代に臆面もなく言うのけると、信吾はほのかに鼻先をくすぐる牝の淫臭に誘われるまま股座に顔面を寄せていった。

「……………」

もちろん貴代は抗わない。息子の行動を制そうともしない。やんわりと股を開き、腰を押し出すようにして、自ら信吾の鼻面に恥丘を擦りつける。

「んう……はああ、あああ……」

クーンと小鼻を膨らませるなり、濃霧のごとく押し寄せてきた生の女臭に、信吾はクラクラと目眩を起こした。これまでオカズにしてきた穿きふるしの残り香とは比べようもないほど鮮烈な牝の淫臭に生殖本能が煽られ、ジリジリと前立腺が痺れだす。

「信吾は、匂いが好きなの、ん？ アソコの匂いに興奮しちゃうんだ？」

「……ん、好き……お母さんの匂いが……ふう、ふうう、興奮するっ、するんだ」

鼻に掛かった声色で甘く問うてきた義母に女臭へのフェティシズムを打ち明けると、信吾はクレヴァスの合わせ目に鼻面を埋め、飢えた獣のごとく鼻息を荒げて、美母の淫香を吸い込んだ。

嗅げば嗅ぐほど秘臭は甘酸っぱく、芳しく変化する、そんな気がした。

愚息はますます悩ましくされ、触れずして射精しそうなほどに膨れてくる。

「もう、そんなに匂いを嗅いで、本当に好きなのね。臭くはないの？」

「ふっ、ふっ、臭いもんか……んはあ、ふう、はああ」

「フッフ、そうよねえ、信吾はいつもしていたんだから……お母さんの汚れたショーツで、沁みがついたところの匂いを嗅いで、いつもいつも、ひとりでいけないことをしていたんですものね」

貴代は独り言のように呟きながら、軽く腰をグラインドさせて、さらなる淫臭を息子に与えた。

「はぁ、はぁぁ……ね、ねえ、お母さん、僕……僕、もう……」

信吾は切羽詰まった面持ちで貴代の顔を見上げた。

シャツの上から陰茎を握り、物欲しげな眼差しで慰めをねだる。

「あらあら、どうしたの？　もしかしてエッチな気分になってきちゃった、ん？」

「う、うん、だから……」

「だから、お母さんともっと、エッチなことがしてみたい？」

「したいっ、してみたいよ。お願い、お願いっ！」

自分から求めるまでもなく、淫らな戯れに誘ってくれた義母に声を大にして訴える。

「今日のことは誰にも内緒よ、いいわね？　絶対に言っては駄目ですからね」

形ばかりに口止めをすると、貴代はすっと息子の前にしゃがみ込み、静かに唇を重ね合わせた。激しく舌を絡ませ、幾度となく唾液を飲み交わし、熱烈なディープキスで禁忌の蜜戯、その幕を開ける。

大人の道徳心を捨て去って、女体を芯から火照らせて……。

母の理性をもかなぐり捨てて、女陰をドロドロに潤わせて……。